



本を読もう

# らのイナん #6

はじめての発売日編

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

今日の新刊!!

## らのけんってどんなお話??

三郷<sup>みさと</sup>学園高校「ライトノベル研究部」

——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを目的とした志<sup>こころ</sup>しの高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまったく系日常部活コメディなのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。そしてまさかのラノベ作家デビュー!?



赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子担当。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦勞は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



紺野司

ラノベ作家としての華子を担当する編集者。AG文庫編集部所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

都心に複数のチェーン店を構える、とある大手書店。

そのライトノベル売場で華子は胸をときめかせていた。

そう。

今日は白井華子（ペンネーム…一条れん）のデビュー作「まんまミリア・キャット！—今なら無料でキャットがついてきますが何か？」（通称…まんみ）の発売日なのだ！

ラノベ作家志望者なら誰でも一度は憧れる「自分の本が本屋に並んでいる」光景を、華子は今日まさに目の当たりにできるのだ！

そして華子は昨日からそのワクテカを抑えることができず、一睡もできぬまま朝を迎えていた。

小さな胸をドキドキさせながら、いよいよ華子はAG文庫のある棚に向かっていた。

そしてそこには期待通り華子の新刊がずらりと並んで——いなかった!?

「ふえっ!?!—」

華子は動揺した。

今日は確かにAG文庫の発売日。

1ヶ月前からカレンダーに印をつけて、毎日毎日指折りながら心待ちにしていた日なのだ。自分の本が並んでいないわけがない。

だが目の前に並んでいるのは他の作家さんの本ばかり……。

「まんみー」は1冊も置かれていない。

華子はおろおろとA G文庫の棚の前行ったり来たりした。

「ま、まさか……」

突然、華子の脳裏に最悪のシナリオが浮かんだ。

もしかして新刊の出荷直前にこんなことがあったのでは……!?

A G文庫編集長「おいおい、なんだこの『まんみー』ってのは！ ちょっと読んだがクソつまんねーじゃねーか！ 担当は誰だ、ごるあ！」

華子担当編集紺野司「私です」

編集長「紺野か！ 貴様こんなゴミ本を作ってA G文庫ブランドに泥を塗る気か!？」

紺野「し、しかしそれは白井さんと精魂込めて作ったデビュー作で、内容もしっかりとした……」

編集長「問答無用だ！ 俺が認めない本はA G文庫からは出さん！ なぜなら俺が、俺がA G文庫だからだ!!」

司「わ、判りました……（くそっ、明らかなバワハラじゃないか!）」

「あ、あ、あああ……」

華子はその場で泣き崩れた。

「ごべんなざい、ごべんなざい、紺野さん……あたしの、あたしの力が足りなかったばかりにー!!」

周囲の客が奇異の視線を向け始めるが、華子の涙は止まらない。

「今考えると恋愛描写も希薄だったし、戦闘描写も今ひとつ迫力が足りなかったし、主人公には魅力なかったし……！ あああああ、ダメだわ、何ひとつ面白いところが思い出せない……!! やっぱりあたしには動物擬人化ラノベなんて無理だったのよー!」

一度つまらないと思い始めると、とことん自分の作品がつまらなく思えてくるのは作家共通の性である。

そう、「ツマンネ病」は死に至る恐ろしい病なのだ。

「あの、お客様?」

「ふあい?」

「新刊を並べますので、ちょっとそこ、どいていただけますか?」

A G文庫の棚の前でへたり込んで泣く華子に、書店員のお姉さんが優しく声をかけてきた。

「新刊を並べ……? あ、はいっ、すみませんっ!!」

華子はバネ仕掛けの人形のように素早く飛び起きた。

書店員のお姉さんは、すみません、ありがとうございます、などと言いながら、古い本を棚

に差して平台のスペースをあげ、今月の新刊を並べ始めた。

ハンカチで涙をぐしぐし拭きながらよろよろと脇に避けた華子は、まだショックから立ち直れずに呆然とそこに佇んでいる。

だがやがて華子の視線はその書店員さんのお姉さんの手許に釘付けになった。

「わああああ……」

華子はキラキラと目を輝かせた。

そう、店員さんが並べているのは間違いなく華子の「まんみー」。

華子は今まさに「自分の本が本屋に並んでいる」光景を目撃しているのだ!!

「そ、そうよ! 今考えると恋愛描写も頑張ったし、戦闘描写も今まで一番良く描けたし、主人公は超魅力的だったし……! そんな面白い本が回収なんてされるわけじゃない!!」

華子は鼻息をふんふんさせながら小さな胸を張った。

「ツマンネ病」から一転、「俺サイコー病」の発動である。

実際には華子は1週間前に見本誌を10冊ももらっているのに、普通に考えると回収なんてあり得ない話なのだが……。

しかしこの日の華子は普通ではないのでそれもしようがない。

「うわあー、並んでるよー……あたしの本が本屋さんに並んでるよー……」

華子はうっとりしながら平台に並べられた「まんみー」に頬ずりした。

シユリンクされた新刊のすべすべな肌触りが華子をさらに夢心地にさせてくれる。

お父さん、お母さん、華子は今、幸せです——産んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう——。ああ、まるで世界のすべての幸せが今この一点に凝縮されているかのよう——。

……。

「あの、お客様?」

「はい?」

「その……よだが、本に……」

「はわっ!?!」

先ほどの書店員のお姉さんの声に、華子は我に返った。

見ると確かに並べられた「まんみー」に自分のよだれの跡がくつきりつついている……。

書店員のお姉さんのなんとも言えない視線が華子の体をちくちくと突き刺した。

「こ、これ買います!」

華子は慌てて「よだれのついた本」を手を取った。……つもりが勢い余って「まんみー」を

5冊手に持っていた。

「あ、はい、お買い上げありがとうございます!」

「はううう……」

見本誌をすでに10冊もらっているのに、さらに自分で5冊も買ってしまった……。我ながら

あたしは何をやっているのだろう……。

「でも！」

自分の本が本当に本屋さんに並べられていて、しかもちゃんと買えるという事実を確認できて、華子は幸せな満足感を覚えていたのだった。



1時間後。

華子はまだ同じ本屋さんにいた。

しかもまた泣き崩れて。

「うああああん、あたしが5冊買ってから『まんみー』が1冊も売れないよおおお……」  
A G文庫の棚からちよつと離れた物陰<sup>ものがけ</sup>で、華子は壮絶<sup>まじげつ</sup>に落ち込んでいた。

そう。

あれから1時間、華子の「まんみー」は1冊も売れていなかったのだ。

他の作家さんの新刊はちよいちよレジに持って行かれるのに、「まんみー」はびくりとも動かない。

「やっぱりよく考えると展開も強引だったし、ミアキャットと眼鏡<sup>めがね</sup>美少女の組み合わせもい

まいちだったし……あああああ、ダメだわ、何ひとつ面白いところがない……!!  
やっぱりあたしには動物擬人化ラノベなんて無理だったのよー! もういやよー! このまま消えちゃいたいよー!」  
ツマンネ病再発。  
しかも今回は「あたしなんか生まれてこない方が良かったんだ病」を併発しているので、さらに深刻です。  
ちなみにラノベの1巻目はカバーイラスト・オビ・本の裏にあるあらすじなどが読者さんの主な購入判断材料となるので、中身はあまり関係なかったりしますが、それを今の華子さんに説明してもきつと判ってもらえないでしょう。  
「はっ!?!」  
華子の視界に「まんみー」を手にとった高校生と思<sup>おぼ</sup>しき少年の姿が目に入った。  
その少年は「まんみー」を興味深そうに見つめている。  
（お願い! 買って! 「まんみー」はすっごく面白いんだから! そのままレジに持って行って!）  
少し離れた本棚の陰から、華子は必死に「買え買えオーラ」を放出する。  
初めて自分の本を手を取ってくれたお客さん。これを逃<sup>のが</sup>すわけにはいかない……!!  
少年はカバーイラストをじっくり見た後、オビを確認してから本の裏のあらすじを読み始め





「あの……これ、買います……」  
 「お買い上げありがとうございます〜」

自分の新刊がたつぷり詰まった紙袋を持って、華子は途方に暮れていた。確かにあつという間に20冊売れたわ……自分に、だけど……。がつくりとうなだれる華子。

神様。自業自得とはいえ、これはちょっとひどすぎるんじゃないでしょうか……。

「はっ!？」

華子が神様に愚痴を垂れ始めた時、「まんみー」をレジに持って行くポニーテールの少女の姿が目に入った。

「こちらカバーおつけしますか？」

「はい、お願いします」

少女はお金を払って「まんみー」を受け取ると、そのまま学生カバンにそれをしまいこんだ。

「あ、あ……」

初めて自分以外に売れた「まんみー」を目撃して、華子は嬉しさのあまりその場を動けなくな

なった。

(やった……やったわ! あたしの、あたしの本が初めて売れたわ……! 嬉しい……心の底から本当に嬉しい……!)

歓喜に身を震わせる華子を周囲の客が訝しげに見つめている。

しかし喜びに打ち震える華子はまったく意に介さない。

「はっ!?! いけない、こんなことしてる場合じゃないわ!」

言うが早いかな、華子は脱兎のごとく先ほどの少女のあとを追ったのだった。

◆ 「あ、あのー!」

「はい?」

華子は少女に追いつくと息を切らしながら声をかけた。

声をかけられた少女は少し戸惑った表情を浮かべて華子を見つめている。

「よ、良かったら『まんみー』の感想を聞か……!」

そこまで言って華子はフリーズした。

(し、しまったわ……「まんみー」の感想を聞こうと思ったけど、この子、買ったただけでまだ

全然読んでないじゃない……!!)

とても当たり前前に気づき、華子は盛大に狼狽うろたえた。

普通ならすぐに判りそうなものだが、この日の華子は普通じゃないからしょうがない。

「あ、あの……」

本がたつぷり詰まった紙袋を持ちながらもじもし始める華子。

その様子を見て、ポニーテール少女はちよつと困った顔で首を傾げた。

(……どうしたのかしら、この子……小学生みただけ……もしかして迷子にでもなったのかしら……?)

ポニーテール少女がそんな心配をし始めた時、華子は紙袋を地面に置いて、ぱつと両手を差し出した。

「あの、握手あつかいしてください！」

「はい？ あたしと……ですか？」

「はい、握手してください！」

真剣な表情で迫る華子に、少女は戸惑いの色を濃くする。

「あの……だめ……ですか？」

うるうるとした瞳ひとみで、華子は泣きそうになりながら懇願こんがんする。

「えっと、なんだかよく判らないけど、あたしでよければ……」

「わー、ありがとうございますー！」

華子は喜色満面きしよまんめんで少女の手を握りにぎ、ぶんぶんと上下させる。

ポニーテール少女は訳が判らず、ぎこちない愛想笑あいせむわらいでそれに応える。

「ありがとうございます！ すごい元気が出ました！ あたしこれからも頑張りますー！」

「あ、はい、なんか判ないけど……頑張つて、ね？」

「はいー！ がーんーばーりーまあーす！」

狐きつねにつままれたような表情をする少女をあとして、華子はスキップをしながら駅に向かった。

自分の作品の「読者第一号さん」と握手した両手の幸せな感触を反芻はんすうしながら。

2巻はもつと面白いものを書くぞ、と決意を新たにする華子なのだつた。

## ● 「らのけん！」 シリーズ掲載号一覧

- |            |        |       |        |                   |
|------------|--------|-------|--------|-------------------|
| G A 文庫マガジン | 7月24日  | 配信号   | …らのけん！ |                   |
| G A 文庫マガジン | 9月     | 合併配信号 | …らのけん！ | 2 夢の最終選考編         |
| G A 文庫マガジン | 10月27日 | 配信号   | …らのけん！ | 3 はじめてのおつか…うちあわせ編 |
| G A 文庫マガジン | 11月27日 | 配信号   | …らのけん！ | 4 思い切って告白しちゃうぞ編   |
| G A 文庫マガジン | 12月25日 | 配信号   | …らのけん！ | 5 ペット攻めたり編        |